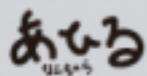


キャンパスライフ 駄弁芝居・70分

POISON & MUSIC

毒と音楽 

2016 9.17 SAT  
— 9.20 SUN

あひる

[www.ahirunanchara.com](http://www.ahirunanchara.com)

下北沢 サ・スズナリ

登場人物

縦山 鈴木 相川 森口 谷井 植村 新沼 磯井 岸原 岡田 大山

喫茶店。カウンターがあって、あとはテーブルが1つ。  
マスターの大山とバイトの岡田が暇そうにしている。

岡田 ねえ、オオヤマさんってさ、大学行った人？

大山 うん。

岡田 へー。高校は？

大山 だいたい高校卒業してから大学行くよね。

岡田 じゃあ中学は行ってないんだ？

大山 どういう意味？

岡田 大学行ってたとか、意外だね。

大山 そう？なんで？

岡田 いや。ほら。ねえ。

大山 だから、どういう意味？バカだって言いたいのか？

岡田 いや、オオヤマさんのことバカだとは思ってるけど。

大山 思ってるのかよ。

岡田 喫茶店のマスターってさ、昔は不良だった人が更生してなるイメージあるじゃん。

大山 ないよ。どんな偏見だよ。

岡田 そういう偏見が、私にはあるのね。

大山 偏見だってわかってるなら、なくしたほうがいいよ。

岡田 じゃあ、不良じゃなかったのね。

大山 普通だったよ。

岡田 でも、大学は中退だよな？

大山 なんで決めつけるの？

岡田 喫茶店のマスターってさ、元不良じゃない場合はさ、大学をドロップアウトした人ってイメージあるじゃん。

大山 だから、ないよ。偏見がすごいな。

岡田 じゃあ卒業してるの？

大山 してるよ。

岡田 となると、あのパターンか。

大山 まだあるの？

岡田 若いころは世界中を放浪してただけど、日本に帰ってきたらどこにも就職できなくて、親にお金借りて喫茶店始めたパターンでしょ？

大山 世界中を放浪もしてないし、親に金も借りてない。

岡田 そうなんだ。だとすると、あのパターンかな？

大山 ねえ、喫茶店のマスターに対して、何種類の偏見があるの？

カラコロンカラン。と音がして、岸原が入ってくる。

大山 いらっしやいませ。

岡田 じゃあさ、宝くじが当たって夢だった、

大山 お客さんきたから。

岸原はテーブルのところに座る。岡田は椅子から動かずに。

岡田 あー、キシハラさん、いらっしやい。何にします？

岸原 コーヒーをください。

岡田 はい。コーヒードー！

大山 はいよ。

岡田 外、暑かったでしょ。

岸原 そうだね、まだまだ暑いね。

岡田 じゃあアイスコーヒーがいいんじゃない？

岸原 あ、そうしようかな。

岡田 アイスコーヒー、追加！

大山 はいよ。え？追加でいいんですか？

岸原 …え？

大山 いや、ホットコーヒーをやめてアイスコーヒーにするんじゃないくて、ホットコーヒーとアイスコーヒーをご注文ってことでいいんですか？

岸原 あ。

大山 ですよね。

岸原 あと、グレープフルーツジュースを2つください。

大山 え？

岡田 どんだけ飲むんだよ。

大山 あとから、お友達でも来るんですか？

岸原 来ないですけど。

大山 じゃあなんで。

岸原 外、暑かったんで、喉かわいちゃって。

大山 はあ。でも。

岡田 いいから気が変わらないうちにとっとと出しちゃいなよ。こっちはもうかるんだから。

大山 そういうこと言わないの。喋ってないで、おひや、出して。

岡田 それ、バイトの仕事じゃん。

大山 うん、だからだよ？

岡田 あ、バイトって私のことか。

大山 なんだと思ってんだよ。

岡田 キシハラさん、おひやいる？

岸原 います。

岡田 いるんだ。どんだけ飲むんだよ。

岡田はしかたなく、おひやを取りに行く。

大山も、グレープフルーツジュース他の準備をする。

岸原 何の話をしてたんですか？

大山 え？

岸原　なんか宝くじがどうこうって。

岡田　喫茶店のマスターって、どういう人が、って話をしてたの。

岸原　ああ。

岡田　喫茶店のマスターって、宝くじが当たって夢だった喫茶店をオープンした人、ってイメージあるじゃん。

岸原　あるね。

大山　あるんですか？

岸原　日本中の喫茶店は、ほぼ全部それでしょ？

大山　そんなことないですよ。

岸原　ドトールは全部そうだって聞いたけど。

大山　そんなわけないでしょ。

岡田　そうだよ、それはスターバックスだよ。

大山　それも違うよ。チェーン店は絶対違うでしょ。ていうか、マスターいないでしょ。

岸原　あ、そうか。

岡田　で、この店はどうなの？

大山　宝くじとか当たってないよ。

岡田 じゃあどうやってできたんだよ。

大山 普通にだよ。普通に働いてお金貯めて、オープンしたんだよ。

岡田 そんなわけないよ。

大山 そうなんだって。

岡田 いやいやそんなわけないよねえ。

岸原 そうだね。喫茶店っていうのは、何かわけありの人がやってるはずだからね。

大山 キシハラさんも偏見がすごいな。そんなことないですよ。

岡田 あ、わかった。

大山 絶対はずれてると思うけど、なに？

岡田 言いたくないんでしょ。

大山 え？

岡田 言いたくない理由があるんだよね？

岸原 あー、そっちのパターンね。

大山 どういう意味？

岡田 大学卒業した後に、刑務所に入ってたんだよね。

大山 違うわ。

岸原 出所して初めて飲んだコーヒーの味が忘れられなかったんだろうね。

大山 そんな思い出もないわ。

岡田 そうそう、それで、こだわりコーヒーの店を出したわけだよ。

大山 こだわりもねえわ。インスタントだわ。

岸原 え？

大山 あ、でも、美味しいインスタントなんで。

岸原 ならいいか。

岡田 でも、なんかあるでしょ、普通なわけないもん。

大山 本当、ただ喫茶店をやりたかった普通の人間だから俺は。

岸原 本人は自覚がないだけですよ。

大山 え？

岸原 本人にはわからないんですよ。みんな自分のことは普通だと思ってるんですよ。

岡田 そうそう。ちよつとやってみてよ。

大山 なにを？

岡田 大学生の頃のオオヤマさん。

大山 はあ？

岡田 やってみて、大学生の頃のオオヤマさん。それ見て、普通かどうか判断するから。

岡田と岸原は去る。この時点でテーブルの上には、

コーヒー、アイスコーヒー、グレープフルーツジュース2杯。

おひやは出てない。あと、伝票がある。

大山、磯井、新沼、植村がテーブル席に座る。

カウンターの中に谷井。

新沼 OK、はじめよう。

植村 何をですか？

磯井 バンドやろうぜ！

植村 え？なにになに？

磯井 バンドやろうぜ！

植村 話が全然見えないんだけど。

磯井 バンド、やろうぜ！

植村 だから。

新沼 ウエムラ。

植村 はい。どういうことですか、ニイヌマ先輩。

新沼 バンドやろうぜ！

植村 説明お願いします。

新沼 軽音楽部に入って、バンドをやろうと、そして天下とろうぜ、ということだよ。

磯井 バンドやろうぜ！

植村 イソイは、それしか言わないけどさ、どうしたの？

磯井 ウエムラくんからロックを感じるからさ。バンドやろう。

植村 俺、楽器とか何も弾けないんだけど。

磯井 あなたには、カスタネットがあるじゃない。

植村 小学生以来触ってないわ。

新沼 というわけで、ウエムラ、今から君をテストする。

植村 なんなんですか？

新沼はカスタネットをテーブルに置いた。

新沼 叩いてみる。

植村 叩いてみるって。

新沼 なんだ？ボーカルがやりたいのか？それはダメだ、ボーカルはイソイだ。

植村 いや、そういうことじゃないです。別にやりたくないんです、バンドとか。

新沼 俺がこのバンドで何をやるのか知りたくないのか？

植村 先輩は何をやるんですか？

新沼 俺は、プロデューサーだ。

植村 楽器じゃないのかよ。

新沼 さあ、叩いてみる。プロデューサーの命令だ。

植村 そういうの興味ないですから。

新沼 ウエムラ。お前、何年生だ？

植村 1年生です。

新沼 イソイとオオヤマは何年生だ？

植村 1年生ですね。

新沼 俺は何年生だ？

植村 すみません、知らないです。だいぶ先輩だとは聞いてますが。

新沼 1年生だ。

植村 まだ1年生だったんですか。何回留年してるんですか。

新沼 6回だ。

植村 それ、たぶんもう卒業できませんよ？

新沼 俺が言いたかったのは、そこなんだよウエムラ。だから、このバンドで売れてそれをきっかけに大  
学をやめようと思っているんだ。

植村 夢見すぎでしょ。

磯井 夢見ようぜ。

新沼 さあウエムラ、カスタネットを叩いて、夢の扉を開けるんだ。

植村 ちよつと待ってください。オオヤマは、なんなんですか？

新沼 え？

植村 いや、俺、オオヤマに連れて来られたじゃないですか。オオヤマもこのバンドのメンバーなんです  
よね？

新沼 もちろんそうだよ。

植村 オオヤマの楽器はなんなんですか？

新沼 言ってみてやれ。

大山 : カスタネット。

植村 どういうこと？なにこのバンド、ボーカル、カスタネット、カスタネット！

新沼 絶対売れると思うだろ？

植村 思わないですよ。

新沼 オオヤマのカスタネットさばきを見ても、そう言えるかな？

植村 え？

新沼 見せてやれよ。

大山 え？ここでですか？

新沼 いいから。

大山は立ち上がり、激しく、カスタネットを演奏した。

新沼 な？

植村 いやいやいや怖い怖い怖い。おいどうした？オオヤマ。お前そんなやつじゃなかっただろう。

谷井 オオヤマくん。店内で楽器の演奏はやめてくれるかな？

大山 あ、すみません。

植村 注意するなら、こっちですよ？

新沼 これは絶対に売れるぞ。

植村 売れないですよ。ていうか、俺、あれやるの嫌ですよ。

磯井 ウエムラくん。先輩はこう言ってるけど、私は売れるとか売れないとかどうでもいいと思うの。

植村 え？そうなの？

磯井 ただロックがやりたいの。

新沼 うん、お前はそれでいい。

新沼は、伝票を持って、立ち上がった。

新沼 あとは、メンバーだけで話せばいいさ。方向性とか。プロデューサーは素晴らしい作品ができるのを待っただけさ。

新沼は入口のところでお会計をする。

谷井 1900円。

新沼 あ、バラバラでいいですか？ホットコーヒー。

谷井 400円。

新沼 すみません。

新沼は400円を支払ってから。

テーブルに戻り、伝票をもとの位置に置いて。

新沼 あとは、メンバーだけで話せばいいさ。方向性とか。プロデューサーは素晴らしい作品ができるのを待っただけさ。

新沼は帰った。

植村 かつこつきたいなら、おごれよ！

磯井 で、どうなの？バンドに入ってくれるの？

植村 俺、楽器とかできないからさあ。

磯井 あなたには、カスタネットがあるじゃない

植村 やりたくないのよ、カスタネットは。

大山 俺だってやりたくないよ。

植村 さっきの演奏を見る限り、やりたくないとは思えなかったけど、そうなんだ？

大山 そうだよ。おかしいだろ、普通はギターとかベースとかドラムとかいるだろ？それがいたうえで、

ちよつとしたスパイスというか、軽いボケみたいな感じで、カスタネットがいるならわかるよ。カスタネット担当って言うておいて、本来の仕事はコーラスだったり、あとはライブでお客さんを盛り上げたりする役目だったら、おかしくないと思うけど、先輩がやろうとしてるのはそうじゃないもん。ガチのカスタネットをやらせようとしてるんだもん。しかも、2人って。2人いる必要がある？2人でカチカチカチカチ、カスタネット叩いたって何のグルーヴも、生まれないよ。そうだろ？

植村 うん。突然すげえ喋ってきたのにビックリして、話の内容があんまり頭に入ってこなかったけど、そうだよな。

大山 だからやりたくないんだよ。

植村 じゃあなんでこのバンドに入ったんだよ。

大山 カスタネットはやりたくないけど、バンドはやりたくないんだよ。

磯井 バンドやろうぜ！

植村 3ページぶり5回目の、バンドやろうぜ！、が出たけどさ、いいのか？カスタネットで。本当はギターとかベースとかドラムが欲しいんじゃないの？

磯井 欲しいけど、それは今、先輩が探してるから。

植村 そっち見付かってからのほうがいいと思うんだよ、カスタネット入れるのは。

磯井 いいんだよ。とりあえず始めたいんだよ。それがロックだから。

植村 なんだよそれ。

磯井 メンバーが集まるまで待つのはロックじゃないからさ。

植村 何がロックとかわからないけど、じゃあ一人で始めればいいじゃない。

磯井 でも、オオヤマくんもウエムラくんもロックだからさ。

植村 知らねえよ。俺がロックってなんだよ。

磯井 ロックじゃないのをロックに変えるのは難しいじゃん。その点、オオヤマくんとウエムラくんもともとロックだからさ。

植村 俺がロックなのを前提で話してるけど、それがわからねえから。

磯井 なんでわからないの？だって、ウエムラくんはさ、ほら、ロックじゃん。

植村 ボキャブラリー！圧倒的に足らねえよ、ボキャブラリーが！お前のロック全然わかんねえよ！

磯井 ……ロックだねえ。

植村 今のが？今のがロックだったの？やっぱりわかんねえよ！

磯井 天才なんだろうね。自分がロックだってわかんないのに、ロックなんだもん。

植村 そう言われると、悪い気はしないけど。

磯井 その天才をいかしたほうがいいよ、ウエムラくんはバンドやったほうがいい。

植村 ……それなら、やってみようかな。

磯井 じゃあ決まりね。よろしく。

植村 よろしく。

大山 :面白いよねえ。

植村 何が？

大山 今のと、まったく同じ流れで俺もバンドに入ったからさ。面白いなあって。

植村 そうなんだ。ちよつと待って。だとすると話変わってくるよ？

大山 え？

植村 いやいや、こいつ、俺にもオオヤマにも天才だからバンドやれって言ってんだよ？

大山 それが？

植村 だとしたら、それ嘘でしょ。バンドに入りたいからって、嘘ついて勧誘してるでしょ。

磯井 そんなことないって。

大山 偶然天才が2人いただけだよな？

植村 オオヤマ、お前バカなのか？

大山 いいえ、天才ですけど？

植村 バカなんだな、お前はバカだ。俺、やっぱりこのバンド入らない。

磯井 嘘じゃないから。

植村 嘘に決まってる。

磯井 じゃあなに？私はイソイじゃなくてウソイだとも言うの？

植村 そんなことは言ってるよ。

磯井 本当に、天才だと思ってるよ。って、言えって、先輩に言われたんだよ。

植村 じゃあ嘘じゃねえかよ。そうだ、あの先輩が怪しすぎる。やっぱりダメだこのバンド。

大山は立ち上がり、激しく、カスタネットを演奏した。

谷井 オオヤマくん。店内で楽器の演奏はやめてくれるかな？

大山 あ、すみません。

植村 え？え？どうしたんだよ？

大山 バンドの危機を音楽の力で解決しようと思って。

植村 できねえよ？お前のカスタネットにそんな力はねえ。

植村、磯井、は去る。

相川と鈴木と森口がテーブル席に座る。

大山はカウンター席に座る。

森口 悪いことがしたいんだよ。

相川 なんだよそれ。

森口 悪いことをして、伝説を残したいんだよ。

鈴木 あのね。

森口 10年後も20年後も、学校で語り継がれたいんだよ。

相川 ヤンキーみたいなこと言ってんじゃねえよ。

森口 …ヤンキー？

相川 ヤンキー知らねえのかよ。

鈴木 髪を派手に染めるなどして、まともな生活をしない若者。のことだよ。

森口 あー、あれか。ヤンキーみたいかもしれないけど、悪いことがしたいんだよ。

相川 断る。

森口 …断る？

相川 断る知らないの？どうやって大学受かったの？

鈴木 相手の希望、要求、申し出などを受け入れることが出来ないという態度を示す。ことだよ。

森口 あー、あれか。断らないでよ、やろうよ、悪いこと。

相川 伝説残すなら、良いことで残せば？

森口 悪いことがいいんだよ。

相川 どうして？

森口 悪い方がかつこいいじゃん。

相川 はあ？

森口 悪！…善…ほら、悪のほうが断然かつこいいでしょ。

相川 言い方じゃねえか。

森口 …断然？

相川 自分で使った言葉なのに？

鈴木 同類の中でかけはなれている様子。のことだよ。

森口 …同類？

相川 同類さえも？話が進まねえよ。

鈴木 そのものと同じ種類のもの。のことだよ。

森口 あー、あれか。

鈴木 ねえ、モリグチ。

森口 なに？

鈴木 今、話しあってたこと覚えてる？

森口 覚えてるよ。記憶力には自信があるんだよ。

相川 日本語全然覚えてねえのによく言えたな。

森口 日本語はしようがないよ、私、帰国子女だからさ。

相川 それにしてもだよ。

森口 : 帰国子女？

相川 そうなると思ったけど。

鈴木 保護者の国外赴任などに伴って日本国外に一定期間滞在し日本に帰国した人。のことだよ。

森口 あー、あれか。

鈴木 話、戻してくれる？

森口 うん。話し合ってたのはあれでしょ、学園祭で出すお店を何のお店にするかでしょ。

鈴木 そう。だから、悪いことがしたい、とか言われても意味がわからないし、困る。

相川 そうだよ。

森口 困らなくていいよ、私、1個、思いついたんだよ、そのお店でできる悪いこと。

相川 なに？

森口 毒を売るんだよ。

相川 は？

森口 ビール、カシスオレンジ、毒、みたいな感じでき。どう？いいでしょ？

相川 よくないわ。

森口 えー？ダメ？

相川 ダメに決まってんでしょ。

鈴木 店出してすぐに逮捕されるに決まってるよね。

森口 いやいや、そんなことないでしょ。

相川 そんなことあるよ。

森口 だってさあ。そんなの信じる？ビール、カシスオレンジ、毒、って書いてあるんだよ？ジョークだ  
と思うでしょ。

相川 それはそうかもしれないけど。

森口 : ジョーク？

相川 それ英語だよ？帰国子女なのになんでわかんないんだよ。

森口 私がいた国は、英語じゃなかったから。

相川 ああ、そうか。

鈴木 面白味のある話。のことだよ。

森口 あー、あれか。まあだからさ、誰も信じないと思うわけ。

鈴木 でも、実際に飲んだら、死ぬわけでしょ？

森口 そんな死ぬような毒じゃないよ。タバコくらいのもんだよ。ていうか、毒を買う人とかいる？いな

いと思うよ。でも、毒を売ってたという事実は残って、伝説になる、と、そういう話だよ。

相川 なるほどねえ。

鈴木 買う人、いるでしょ。

森口 いるかなあ？

鈴木 いるでしょ。自分で飲まなければいいんだから。買って嫌いな人に飲ませるとか。

相川 それはあるか。

森口 えー？そんなことある？…あるか。

鈴木 あるよ。

森口 そっか、困ったなあ。

鈴木 そもそも毒なんかどこで手に入れるんだよ。

森口 コンビニで売ってるっしょ。

鈴木 売ってねえよ。売ってねえから言ってるんだよ。

森口 えー？私の計画、穴だらけじゃん。

鈴木 うん、穴あきまくりだよ。

森口 どうして？どうして穴だらけなの？

鈴木 知らないよ。まあ、諦めるんだね。

相川 でもさ、わりといいんじゃない？毒を売るって。

鈴木 どうしたんだよ。

相川 や、普通にビールとかだけ売っててもさ、そんなのやる人、他にもいるからさ。

鈴木 うん。

相川 何か、特徴があったほうが、売上は増えると思うんだよ。

鈴木 それはそうだけど。

相川 だから、毒を売るのが、いいと思う。

森口 本当？

相川 たしかに今は穴だらけだけど、いろいろ考えればいけるんじゃないかな。

鈴木 えー。普通でいいよ。

相川 ぼろ儲けしようぜ！

鈴木 ぼろ儲けはしたいけど。

相川 けど、なに？

鈴木 やっぱりちょっと怖いなあ。

森口 大丈夫だって。

鈴木 そうかなあ。

森口 えー？オオヤマくんどう思う？

大山 え？

森口 オオヤマくんだよね？

大山 はい。

森口 どう思う？

相川 知らない人に話しかけるんじゃないよ。

森口 え？知らない？オオヤマくん。カスタネットの。

鈴木 知ってるけど、話したことないでしょ？

森口 うん、初めて喋った。

相川 芸能人に友達感覚で話しかけちゃうやつかよ。

森口 でも私、知ってるから、カスタネットのオオヤマくん。同じ学校だし、話しかけたっていいじゃん。

鈴木 迷惑だから。

森口 ……迷惑？

鈴木 その人のしたことが元になって、相手や周りの人がとばっちりを受けたり、嫌な思いをしたりするから。

森口 あー、あれか。ごめんなさい。

大山 いえ。

鈴木 別に本物じゃなくてもいいんだよね。

相川 なに？

鈴木 毒。本物じゃなくても、やりたいことはできるよね。

相川 あ、そうだね。スズモト、なんだかんだ言っただけやる気なんじゃん。

鈴木 ぼろ儲けはしたいからさ。

森口 えー。本物にしようよ。でも、それでいいよ。

相川 どっちなんだよ。

森口 毒、コンビニに売ってないならお手上げだからさ。

相川 化学系の研究室とか行ったらあるかもしれないけどね。

森口 そうなの？

鈴木 アイカワ、今、完全に余計なこと言ったね。

相川 ごめん。今の忘れて。

森口 私、記憶力には自信があるんだよ。

鈴木 偽物にしておこう。それでも悪の伝説は作れるから。ね。

森口 …うん。

相川 じゃあ、それで決まりね。そろそろ学校戻らないと。

鈴木 本当だ、5限始まっちゃう。

3人は帰ろうとする。

ここまでで、前のシーンの人とも協力してグラスを空にしたい。

できなかったらしょうがないけど、なんか残して帰ると感じ悪いので。

谷井 500円。500円。400円。

それぞれ支払って、出て行く。

お会計の間、大山は3人が飲んでたものを片付けようとする。

谷井 やんなくていいよ、バイトじゃないんだから。

大山 や、暇なんで。

谷井 じゃあ、よろしく。

大山はグラスなどを片付ける。

谷井 有名じゃん。

大山 え？

谷井 さっきの子たち、カスタネットのオオヤマ、って。

大山 馬鹿にされてるだけですよ。

谷井 素直に喜べばいいのに。

大山 タニイさんだったら喜びます？

谷井 喜ぶよ。大いに喜ぶよ。

大山 カスタネットですよ？

谷井 カスタネットでも、トライアングルでも、ピアノでも、ブランコでも同じでしょ。

大山 ブ

谷井 言わなくてもわかってる、ブランコは楽器じゃねえよ、そう言いたいんでしょ。

大山 ええ。

谷井 でも、それくらい、なんでも同じってことよ。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

## 毒と音楽（おためしサンプル）

2016年版

---

2016年9月29日 初版発行

2017年3月20日 改訂（ver.1.001）

著 者 関村俊介 © 2016年

発行者 石村寛之

発行所 有限会社レトロインク

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7

電話 0422-24-9529

---